

2020年12月29日放送

## 川崎病と川崎富作先生

日本赤十字社医療センター 周産母子・小児センター  
顧問 土屋 恵司

川崎病の発見者である川崎富作先生が本年6月5日95歳でご逝去されました。

川崎病という子供の病気を皆様ご存知でしょうか。日本人の名前の付いた疾患は多数ありますが、世界中で症例が確認され、国内でも毎年1万5千人以上の新しい患者さんが発生し、現在もなお原因不明で、研究者が世界中にいるという疾患は川崎病において他にはないといえます。発熱と発疹、眼球結膜が赤く充血し、口唇や舌が発赤し、首のリンパ節が有痛性に腫れ、手足に硬性浮腫と言ひ霜焼けのような赤い腫れが出現し、腫れが引いた後、指先から皮がむけてくるといった症状がみられる1-2歳の子供たちに多く発症する病気です。

本年新型コロナウイルス感染の後に、発疹やつま先が赤くなるなど川崎病に似た症状を呈する10代の子供たちが欧米で続発し、話題になったことを覚えていらっしゃる方も多いと思います。これは新型コロナウイルス感染後に起こった血管炎のようで、川崎病とは異なる部分も多いようですが、川崎病の本態も中小動脈に起こる一過性の血管炎です。

川崎病重症例では冠動脈瘤を後遺症として残すことがあり、冠動脈瘤の急性閉塞を起こしますと心筋梗塞につながる恐れがあります。原因はいまだに判っておりません。冬場に多く発生したり、ある地域に集中して発生したりする感染症的な要素もありますが、海外で暮らしていても日本人に多く発症したり、欧米人の20倍以上の罹患率で遺伝的要因もあります。日本での年間発生数は約1万5千人を越えゆっくり増加する傾向にあります。

約60年前この病気の第1例を経験したのが、日本赤十字社中央病院（現在の日本赤十字社医療センター）で1961年1月5日正月休み明けの当直業務についていた卒後12年目36歳の中堅小

児科医、川崎富作先生でした。川崎先生は、6日間の高熱の持続を主訴として救急外来から朝方入院した4歳3か月の男児の主治医となりました。眼球充血、全身の紅斑、頸部リンパ節腫脹、口唇口腔内の発赤、手掌足底の紅斑を呈しており、経過中に強い炎症反応、黄疸や貧血を認めました。解熱後に指先から起こった膜様落屑が印象に残ったようであります。それまで見たこともない臨床像で、溶連菌は検出されず、抗生剤もステロイドも効果がなく確定診断に至らなかったものの、1か月ほどの入院で軽快退院していますが、この症例は川崎先生に強い印象を残したようであります。川崎先生の凄いところは、臨床像を精緻に観察記録した上で、既存の疾患に無理に当てはめようとしなかったことだと思います。

翌1962年2月にやはり当直中、敗血症疑いで入院した第2例を経験し、思わず「同じだ！」と大きな声が出たそうであります。その年に続けて5症例を経験し、7例をまとめて、同年10月、小児科学会千葉地方会で「非猩紅熱性落屑症候群」と

して初めて発表していますが、会場の反応は鈍く、質問も無く、追加発言等も無かったそうです。

しかし、その後も、毎年同様の症例を5例、10例と経験し、約6年間に経験した50例をまとめ、1967年3月、「指趾の特異的落屑を伴う急性熱性皮膚粘膜リンパ腺症候群-自験例50例の臨床観察」として、既存の疾患概念では説明不能な新しい疾患として、45ページに及ぶ論文をアレルギー誌に発表しました。

川崎病の原著論文発表から半世紀が過ぎていますが、新しい独立した疾患として認められるまでの過程は決して平たんではなかったようです。原著が発表された年には、小児科学会東京地方会で数度にわたり本症につき議論がなされました。シンポジウム形式で議論を深めるよう学会会場で提案がありましたが、時の小児科学会の重鎮であった教授から、本症は新しい疾患ではなく「子どもはStevens-Johnson症候群と診断している」との文字通り鶴の一声で、公開討論の場は閉ざされ、以後5年間日本におけるこの疾患に対する検討は停滞することとなりました。川崎先生は忘れられない出来事であったとして、後にしばしば、形骸化したアカデミズムが、いかに柔軟性を欠き、「未知なるもの」に鈍感であるかを露呈した、と述べておられました。

その後の経緯は皆様ご存じのことと思いますが、全国から症例報告が相次ぎ、初の全国調査が行われ、当初予後良好と思われた本症に、10例の死亡例が確認されるに至り、大きく注目されることとなりました。1970年には実態把握、原因究明のための厚生省班会議が発足、日本での発生拡大について英文の論文が発表されました。この当時の日赤の医局では川崎先生ご自身を筆頭に、全員が本疾患をMuco-Cutaneous Lymph node Syndromeの頭文字をとってMCLSと呼んでいました。1979年には小児科学の教科書「Nelson」に独立した疾患単位Kawasaki diseaseとして記載され、次第に川崎病という呼称が定着していったようです。翌1980年にバルセロナで行われた第16回国際小児科学会において川崎病のシンポジウムが行われ、川崎先生ご自身が座長を務



められ、会場には入りきれないほどの人で埋まったそうです。その後の国際学会では毎度おなじみの光景ですが、講演の後演壇を降りますと、サインや握手を求める人、ニコニコ顔の川崎先生と一緒に写真を撮りたい人の列ができ、なかなか途切れることはありませんでした。

川崎先生はその後、1986年のベーリング・北里賞を受賞されたのをはじめ、武田医学賞、保健文化賞、日本医師会医学賞、日本学士院賞、日本小児科学会賞等数々の賞を受賞されていますが、どちらかというと海外での評価の方が高かったようです。英文化された原著論文に対し、米国心臓学会から「川崎氏が最初にまとめた53ページあまりの論文は驚くほど綿密で、20世紀の中での最も美しい臨床報告の一つと言える」と最大級の評価がなされており、ご逝去の報を受けた米国心臓学会から、米国外の医師としては異例とも言える、川崎先生の業績を称える詳細な追悼記事が掲載され「世界ではロックスター級の位置付け」との献辞を載せています。

川崎先生は、どうしてこのような業績を残すことができたのですか、という質問をされるとお答えになるときに、しばしば「運鈍根感厳」と言っておられました。聞いた方は何のことか判らなかつたかんとすると、すかさず「運は良い師に恵まれ、多くの患者さんに恵まれた運のこと、鈍は鈍重、つまり愚鈍になるということ、根は根気よく、感は第六感を働かせ、厳は自分に厳しく、という意味」とご自身が解説していました。医局で雑談をしているときでも我々に対して、臨床医であるなら「患者のそばにいて観察を尽くし、正しい判断を下せ」、「教科書に常に正しいことが書いてあると思うな、患者から学ぶことが大切である」とおっしゃっていました。説明のつかない臨床症状を呈した症例に出会ったとき、無理に診断をつけず、症例の臨床記録を大切に残すことはその後も続けておられました。川崎病が世に認められ世界的に有名になった後でも、川崎先生の部長室の書棚の上には、診断不能の症例群の観察記録が入ったいくつもの段ボール箱が乗っており、「君、これと同じ症例が、後2、3例揃ったら発表しようと思うんだよ」と、目をキラキラさせながらお話になっていました。

浅草生まれの浅草育ち、相撲好きの寄席好き、外国の講演会でも突然ケン玉を取り出し妙技を披露する茶目っ気の持ち主でした。外来や病棟などで患者さんや親御さんとお話になる時はいつもニコニコされて、優しいお顔で接していらっしゃいましたが、回診の時など若い医者に対し医学的な問題について話をする時、学会発表の内容を検討する時の眼光は鋭く厳しいお顔をされていました。川崎先生が揮毫される“医療は暖かく医学は厳しく”の通りであったと思います。川崎先生は1990年に日赤医療センターを定年退職され、開業医になることも頭をよぎったそうですが、川崎病原因究明のため、川崎病研究情報センターを設立、後にNPO日本川崎病研究センターに発展させ、約30年間なんと無給のまま理事長をお勤めになり国際的な活動を続けてこられました。

川崎先生がご逝去された翌日、神田須田町の川崎病研究センターを訪れた際、研究センター設立時に川崎先生ご自身がお書きになったものが机から出てきたと娘さんから見せていただきました。そこには研究センター設立の目的が書かれており、

川崎病の原因を明らかにすること

原因療法を開拓すること  
補助診断法を確立すること  
予防ワクチンによる予防法を完成させることを目指す。とあり最後に  
夢とロマンを求めて と、ありました。  
川崎先生が 75 歳の時に書かれたもので  
す。

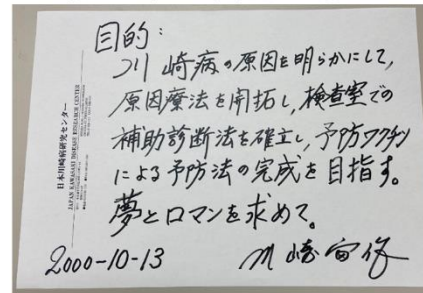
「夢とロマン」、川崎先生らしいと思  
いました。これが川崎先生の夢だったの  
ですね。確かに川崎先生は事あるごとに「自分

の目の黒いうちに川崎病の原因を見つける」とおっしゃっていました。晩年、大変穏やかにお過  
ごしになっていた川崎先生のお心の中は如何であったのでしょうか。本当に頭が下がる思いです。

先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

## 川崎富作先生の夢とロマンとは

川崎先生の机から発見された書には



「小児科診療 UP-to-DATE」

<http://medical.radionikkei.jp/uptodate/>